



## 東日本大震災とレジリエンスを 引き出す災害後のコミュニティ支援

——「物語」をキーワードに」を読んで眠れなかったはなぜか——

川野 健 治

(立命館大学)

### 継続するプロジェクトが連れてきた思い

本特集のコメント論文を依頼されてほどなく、就寝前に「一本だけ」と第一論文の「東日本大震災の被災と復興におけるコミュニティ・レジリエンスと外部支援」を手に取り、30分後には後悔することになった。様々な考えが頭をめぐり、眠れなくなってしまったのである。

評者は2011年3月末にはじめて岩手県の沿岸部に入って以来、2014年度末までは月に1～2回程度、宮城県、岩手県の沿岸部を中心に地域精神保健のチームとして被災地を訪問していた。被災地では多くの混乱や衝突があり、私自身もいくつも失敗をしてきた。それでも行き続けることで繕うことができた取り組みもあるし、そのうちのいくつかは実を結んだものと信じている。その後は福島県沿岸部にも訪問することができたが、2016年3月に東京から大阪に職場が移ったことで活動は終わった。仕事として続けた活動であるから、職を変えれば継続はされない。自分ではそのように整理をつけていた。

4年で終えた評者らの取り組みと比べ、本特集のもととなっている「東日本・家族応援プロジェクト」は10年も続くプロジェクトだという。どれほどの体験と記録が蓄積されたのだろう、そして、これからまだ2年でさらなる展開があるのかと思うと、まずはその意義の深さを直感する。これは東日本大震災に関わった多くの人々の軌跡であり、語りとして形をなした復興の根拠であり、また将来へとつないでいく歴史になるのかもしれない。かくして思わず拍手を送りながら、しかし羨ましいという気持ちが起り、次いで、自分が「仕事」としてやりのこした、

やり損ねたという、どこか心の奥に隠しておいた記憶がよみがえる。そして、評者らが被災地にいたころ、全国から応援に入っていた行政職員の幾人かが「自分にはなにもできなかった」と話して現地を去っていたことも思い出してしまった。どうにも眠れない夜であった。

### 被災地にかかる物語の横溢

間において、あらためて5本の論文を読み通してみると、本特集がキーワードとした「物語」が、実に多様な形式で示されていたことに気づく(表1)。村本による本特集の導入を注意深く読めば、あらかじめ説明されているにも関わらず、その多様さのために、読みながら若干の混乱をおぼえた。被災地—物語という組み合わせは、素朴に「被災者が語ること」を連想させる。

しかし導入に続く、村本の第一論文で扱うものは、著者による物語である。正確には、著者が被災地で聞き取った語りやエピソードを、ショートストーリーとして被災地の外で語り直したものであり、これも確かに被災地に関わる物語である。いや、「証人」という立場を明らかにし、作成の基準を示しつつ生み出された50のショートストーリーは、むしろ由緒正しき被災地の物語というべきであろうか。50の物語は語り手と聞き手の主体的な出会いと物語る力へと収斂し、復興を支える力が見出されるとする。

また、団の第2論文が扱うのは、直接東日本大震災に関わらない「漫画」とそれに触れた読者や来場者の語りである。これもまた評者の素朴な思いとは異なる形で、生み出される物語である。研究手法と

してのインタビューなら、被災者に直接尋ねるであろう「被災体験」は、ギャラリーで、夫々のペースで、漫画として触れる家族の物語に仮託しながら、あるいは少しだけほつれた糸先を解きながら、語られているかのようだ。物語は響きあうことがあるというのは当たり前のことかも知れないが、物語を聴き取る＝インタビューという「手法」から見落とされがちな現象がここでは示される。

斎藤の第三論文は、その漫画展を鑑賞するという体験を解き明かす質的研究である。一見、この論文こそ「被災の物語」とは遠いように思える。あるいは著者自身も、これは物語そのものではなく、仮説を導く研究であると位置づけるかもしれない。しかし、評者はこの論文を読んで、団論文をはじめ他の論文の示す「被災の物語」の共創の意味が理解できた。新たな感情と省察、他者性と重なり感、個と一般、これらの重ね合わせは、実際には語られ、受け止め、語り直されて起こる。だとすれば、斎藤論文もまた、この5本の特集論文の中で響きあう物語の一つと読むべきだろう。

これらに比べると、鵜野の第四論文は「被災の物語」のイメージにもっとも近いデータを扱っている。中でも理不尽さと向き合う、という節は、ロゴスでは納まらない未曾有の災害体験と如何に向き合うのかを示し、被災の物語として「読みたかったこと」でもある。しかし同時に、この論文こそ、物語を響

かせあう形式で書かれていることも指摘したい。民話、民話の語り部の語る自らの経験、未災地の人の語り、さらに生活綴り方までが自在に配置され、その中で文化的多様性、レジリエンス、非当事者性、グリーンワークなど、民話を語る－聞く行為にみられる多様な機能が示される。

最後の中村論文は、支援者支援セミナーの参加者が生み出す多職種連携にかかる語りを扱う論文である。セミナーの開催場所は、被災地の場合もそうでない場合もあり、この論文ではその区別は明示されていないが、被災地との「関係」が述べられている。いわく、多職種連携において「対話の力」は重要であり、それは直接の被災地外でも、あるいはまた日常からの支援者支援にも汎化させたいとする。かくして、5本の特集論文は、被災の物語の範囲を押し広げながら、さらに相互に響きあいながら、単純ではない構造でコミュニティ支援のあり方を読者に示している。

しかしながら、これら被災にかかる多様な物語の横溢は、「よくわからない」という気持ちにもさせられる。これらの物語の相互の関係を著者達はどのように捉えているのだろうか。全体を捉える大きな図式を知りたいと思った。

高野・渥美（2007）は、阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話を扱う考察の中で、聞き手が語り部の期待と異なる反応を示し、あるいは語り部が聞

表1 各論文における物語の外形

	語り手	聞き手	形式	物語の生まれた場所
村本論文	論文著者(被災地での語りを集めた)	論文読者	ショートストーリー	本論文中
団論文	漫画の作者	漫画の読者/来場者	漫画	作品中 パネル展示会場(各地)
	来場者(パネル展示を見た人)	作者	ナラティブ	パネル展示会場(各地)
斎藤論文	来場者(京都でパネル展示を見た人)	研究者	ナラティブ	パネル展示会場(京都)
	論文著者(京都パネル展での語りを集めた)	論文読者	分析結果(ex.M-GTAのストーリーライン)	本論文中
鵜野論文	被災者	民話の会メンバー	ナラティブ	聞き取り場所
	民話の会メンバー(被災地での語りを集めた)	報告会参加者	ナラティブ(語り直し)	報告会
中村論文	セミナー参加者		対話	支援者支援セミナー

き手の期待と異なる内容を語ることで生まれる「対話の綻び」について指摘している。たとえば「当日までの備え」「防災グッズ」「耐震工事」などなど公的なストーリーや教訓が知られていて、その補強を期待する「どうすれば命が助かりますか」という質問に「絶対にこうすれば命が助かる、確証はありません」という答えが返ってくるのである。あるいは期待に応えようとして、体験者の思いとは別に「それでも、防災グッズはないよりあったほうがいいですね」と付け加えることもあるだろうか。しかしそのとき、この物語はすでにその語り手についてのものではない。物語は誰のものか、という問いへの答えは「物語となった時点で誰のものでもある」だとは思ふ。それでもなお、オリジナルの体験者は「それは私ではない。それは私についての物語ではない」と苦情を申し立てることができるように思う。

つまり、多くの物語が、多様な人々の間で生み出され、それらが重なるとき何が起こるのかは看過できない地点である。必ずしも手放しで歓迎すべきことばかりではないのでは、という懸念が残るのである。この特集では、トラウマからの回復は「破壊されてしまった様々な関係性を紡ぎ直すこと」と置かれているが、それは単に物語を共創するだけでなく、いつ、どこで、誰と共創するかを含む。それは逆に、不適切な物語の語り方があることを逆照射しているはずである。

### 語られないことについて

コミュニケーションは、双方向の時代 Web2.0 を経て、さらに SNS など多方向の時代 Web3.0 に入ったと指摘される。かつて、デリダが指摘したように、明かされない情報、遅れて届く情報にこそ価値があるという状況は、ごくプライベートな側面について慎重に配慮してこそ成し遂げられる。今はむしろ、一度誰かがメディアに載せてしまえば、Web をめぐりどこかにその記録は残り続ける。

このようなメディア環境が個人と接続している限り、「意図せず見てしまう・聴いてしまう」可能性は低くない。事実、東日本大震災においては、直接の被災地ではない東京都内で PTSD 症状が報告さ

れ、津波の映像を繰り返し視聴したためとされた。私たちは今、容易に忘れることが許されない時代を生きているのである。かつてのストレスモデルでは、脅威は汎適応症候群を引き起こし、その原因もしくは反応への対処が必要とされていたが、現在のストレスモデルはマインドワンダリング、すなわち中枢系で「気になり続ける」という問題を指摘する。そしてメディア環境は、この中枢系のバックアップとして、脅威情報をさらに維持しつづける仕組みといえるのではないだろうか。

他方で、東北沿岸部で伝わっていた津波に備える言説が、今回の東日本大震災では生かすことができなかったという指摘もあった。物語が共創される次の段階で、直接携わらなかった人と共有すること、あるいは物語の蓄積と情報化について考えることも今後の課題になるのかも知れない。この点について、アカデミアの営みだけが免罪されるわけではないだろう。

### 作業仮説の行方

本特集では、トラウマ、レジリエンス、また証人や物語の機能について多くの作業仮説が呈示される。しかし、これらの大きな概念や仮説について、論文を通してどこまで検証されたと受け止めてよいのだろうか。例えば鶴野論文では、「やまもと民話の会」の事例において、民話を語り継ぐことへの強い使命感と責任感を呼び起こされた住民のエピソードから、民話活動によってアイデンティティが確認されて、町民たちに「レジリエンスが生起された」としている（同上、p6-12）。しかし、アイデンティティの確認とはどのようなことなのか、それに支えられているという文化的多様性、さらに発揮されたレジリエンスの姿を十分に読み取ることが評者にはできない。あるいは村本論文において、トラウマについて「恐怖に伴う圧倒的無力感と孤立無援間に由来する関係の破壊にあり、回復は破壊されてしまったさまざまな関係性を紡ぎ直すこと」と置いたことは、このプロジェクトを通してどのように評価されたのだろうか（p17, 123）。このような疑問は、本特集を読み進めるうえで心に残ったことの一つであ

る。言い換えれば、従来の医療モデル・個人モデルではない、本特集の掲げるコミュニティ支援の効果とはどのように確認し、呈示できると考えられるのだろうか。

おそらくこれは明確な研究構造を維持しながら進める一連の検証過程ではないだろう。5本の論文から評者が受け取るのは、その都度、現場において他者と出会い、向き合って共有し、次の瞬間、急速に俯瞰して既存の理論と照らし合わせる、そのような連続するプロセスにおいて了解と発見を紡ぎ、そして現象を局所的に承認するプロジェクトの姿である。現象と理論の企まない積み上げを前提とする科

学、継続自体を本質とする記述モデルが必要とされるのではないだろうか。本プロジェクトのアカデミアへの更なる貢献を心より期待させていただきたい。

## 文献

高野尚子・渥美公秀 2007 阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察 - 対話の綻びをめぐって - 実験社会心理学研究, 46, 185-197.

(2019. 12. 3 受理)

(ホームページ掲載 2020年4月)